

五高新聞

平成25年度 第3号

(全国総文祭特集号)

発行：五島高校新聞部

しおかぜ総文祭開催 縁の下を覗く

全国高校総合文化祭
JRCボランティア部門

31日(水)～8月2日(金)

開催地：五島市

全国の高校生五島に集う

七月三十一日から八月四日にかけての五日間、長崎しおかぜ総文祭が長崎県下各地の会場で開催された。しおかぜ総文祭とは、全国の文化部長が総力を結集して開催する唯一無二の総合文化祭のことである。五島市では、JRC(青少年赤十字)ボランティア部門が開催され、多くの生徒が会場の受付や案内、会場設営などを行った。開催会場となったのはこの五島高校である。全国の様々な地域から本当にたくさんの生徒がここ五島高校に集まって



会場のセッティングの様子

た。中でも北海道の生徒が非常に暑苦しそうにしていたのが印象に残っている。研究発表会はメモリアルホールで行われ、日本赤十字社代表の方の講話があったり、崎山地区から有志で参加した生徒の『チャンココ』の踊りが花を添えたりした。研究発表では一日目ということもあり緊張している様子も見られたが、どの学校も非常に個性のある発表ばかりで少しも退屈さを感じさせることはなかった。ある学校は観客を体験に参加させて発表をさせたりし、「無関心」を生み出さないような工夫に深く感心した。



各学校の活動報告

ボランティア精神

生徒たちが、文化交流を行っている中、集まったボランティアは各々の作業に精を出していた。もちろん生徒だけでなく、大勢の先生方にも協力していただいた。ある人は会場の掃除をしたりと、個人個人の出来ることを確実にやり遂げていった。

に思い出として残しておいで頂きたいものである。

は決して主役になることはできない。なぜならば主役を引き立てるために存在しているようなものであるからだ。

しかし、この目立つことのない存在が無くて主役が成功を収めることができないのだろうか。マラソンの際に、コース誘導をする人や部活で球拾いをする後輩部員、毎日放課後に机を並べてくれる人がいるからこそ私たちは日々を充実させて送ることができるのだ。ボランティアというものは義務ではない。個人の意思でやるかやらないかという選択をすることが出来る。

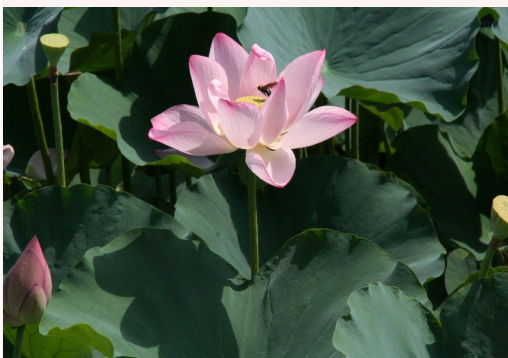
感謝の想い

今回のしおかぜ総文祭のJRC・ボランティア参加部門は多くの生徒や先生方

が集まって形成された。参加した一人ひとりが様々な意思を持っていたことだろう。そして、その意思とは決してマイナスでなく、ただ奉仕するというプラスの意思なのではなかったのだろうか。疲労などによる多少の不満があったとしても、作業中には奉仕の心を持っていたのは確かではないだろうか。

大きな大会や平凡な日常、何気ない小さな所にも誰かの思いが加わっているはずである。私たちの日常が成り立っているのは、こうした「裏方」やちよつととした思いやりをできる人がいるからである。そういった人たちがいることを忘れずに、感謝しながら生きていきたい。(流)

五高写真館



お濠に咲き誇った蓮の花に虫たちも引き寄せられるようです。(流)

☆撮影地：五島高校(学校内のお濠)

文化の融合 吹きおかたせる

全国高校総合文化祭
総合開会式
7月31日(水)
開催地：長崎市

心が動く、とはこの瞬間のことを言うのだろうか。七月三十一日、長崎しおかぜ総文祭総合開会式が県立総合体育館で開かれた。これは「文化の祭典」と呼ばれ、半年間の構想期間を経て約五百人の高校生によって創り上げられたものである。



文化が融合した瞬間

開会宣言では「来てくれた人の心に革命を起こす」と宣言され会場のボルテージも高まってきた。もちろん全ては私たちと同年代の高校生によって運営されている。彼らの表情はやる気に満ちあふれていて、自らの「存在証明」をしているようだった。

文化の融合
五角形のステージは一艘



グランドフィナーレの様子

の船に例えられ、世界を文化で繋ぐために出航したのだ。第一部の後半では、国際交流として、韓国、中国、オランダがそれぞれの文化を表現した。多くの文化がまさに一つのステージで融合していた。第二部では、昨年度の開催地である富山県と来年度の交流ステージだった。太鼓と琴の演奏中に、書道部が巨大な紙に文字を書き、美術部がステージをペンキで彩るといふ、奇抜で目を奪われるようなものだった。どれも、トップレベルのステージで、そこからは新たな文化が生まれていた。

私が私であるために
毎年、総文祭では各県の高校生が多くのメッセージを発信する。今年、長崎が発信しなければいけないメッセージがあった。それは「平和」についてだ。「この音から何を想像しますか？」会場に響いたのは一つの小さな鉄球が落ちる音。これは長崎に落ちた原子爆弾に見立てた音である。それに続いて会場に轟いたのは一万七千個の小さな鉄球が落ちる音。これは世界に現存する核兵器に見立てた音である。不気味な轟音が人々の心に突き刺さった。この音が鳴り終わるまでの三十秒間で核兵器の恐ろしさを痛感した。そして、それと同時に自分が今、ここにいるということに改めて感じたのだ。半年間の構想が実った瞬間、世界中に一人ひとりの「存在証明」と「平和」のメッセージが発信された。その瞬間に立ち会えたことを本当に嬉しく思う。私たちにこの感動を伝えていくという義務がある、文化という形で。(降)

文化を語り合う高校生たち

全国高校総合文化祭
高校生文化祭サミット
8月1日(木)～2日(金)
開催地：長崎市

「文化とは何か」みなさんは考えたことがあるだろうか。八月一日から二日間、全国各地から多くの高校生が集まり、全国初の試みである高校生文化祭サミットが行われた。

各地の文化祭の特色

東京の日比谷高校、長野の須坂高校、大阪の枚方高校、福岡の修猷館高校の四校が、各校の文化祭についてプレゼンをした。文化祭の特色、工夫、組織の仕組みなどがはつきりと見えた。また、そのプレゼンに対してつどった生徒たちが質問をし、自分たちの高校に取り入れようと真剣な姿勢を見せた。



語り合う高校生たち

そして、二日目にはシンポジウムが行われた。コーディネーターの林直哉さんが文化の本質に迫った。その内容を紹介したい。皆さんの周りには、行事に無関心、または乗り気で

ない人はいないだろうか。特に学校行事では全員が参加しなければいけないのにも関わらず、そういったやる気のない人が少なからず出てくる。そのような人をやる気にさせるには、まず二十パーセントの人をやる気にさせようとして取り込むことが大切である。そうすることで、取り込まれていない人たちが不安になる。この集団心理を利用する。
生徒中心とは
やる気にさせるのは先生ではない。実行委員等の生徒たちだ。文化祭のような学校行事を通して人間は成長する。これは実行委員たちだけではできない。先生方は見守るだけ。生徒たちが自分たちで気づき、失敗から学び、作り上げることが大切だ。
当り前のように感じるかもしれないがそれは決して簡単なことではない。皆を纏める力、説得力、信頼、そういう力を育むのだ。
文化祭とは「苦しい」ものである。苦しくなければ文化ではない。楽しくなければ祭りでない。愚直にやっていくことが大切。サミットに参加した生徒たちは、それぞれの高校できつとこの経験を活かしてみんなを引っ張っていくだろう。より良い文化祭を目指して。(紅)